せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第116号・平成11年5月1日

年表で読む古平の歴史

《24》

■場所請負人の廃止

「場所」というのは、アイヌの人たちと交易＝物々交換をするための一定の地域のことで、むかしの《古平》はその場所でした。ここで商売をする権利を持っていたのが「請負人」で、一定の運上金（権利金）を納めると、その「場所」で商売ができたのです。

始めは、松前藩から藩士が知行（ちぎょう＝武士の給料）として「場所」を預かり、そこでアイヌの人たちと交易をし、そこで得た品物を商人に売り、その差額が藩士たちの収入でした。しかし、ふだんは威張っていて、商売などの経験のない藩士が、こんなことをやってうまくいくはずがありません。「もち屋はもち屋」で、やはり商人にまかせることが得策だということから、商人からは運上金という名前で商売の権利金というか、場所の賃貸料みたいなものを取って交易の仕事を任せたのです。

しかし、商売のプロともなればそんなことで満足しませんでした。彼らはただ交易するだけでは利益が少ないと、自分たちで直接商売、といっても漁業を始めました。なにしろ「場所」の権利を持っているので、当時はまだ少なかった和人や、アイヌの人たちを使って漁獲量を増やし、自分たちの財産を築いていきました。

江差地方で鰊の漁獲量が減ると、その辺りの漁民は後志地方へ鰊の出稼ぎに来るようになりました。請負人は漁民に漁場を貸して、漁獲量の二分を受け取っていましたがこれが大きな収入でした。

しかし、請負制度というのはアイヌを乱暴に扱い、和人の漁民に対しても横暴であり、請負人の利益のために多くの資源を奪うことでした。

これは、北海道の開拓には全く合わないことなので、開拓使は明治二年、場所請負人の廃止を通達しました。下の文書はその原本です。（49センチ×19センチ）

この文書は、おおよそ次のような意味です。

「今は、全国の大名が領地を天皇にお返しする時勢である。それなのに商人が、場所やそこに住む人たちを支配しているということは、その身分からしてよろしくないので、この度廃止することにした。しかし、いま急に廃止すると、そこで生活している者たちが困ることになるだろうから、少しずつ変えていくことにする。だからこのことをよく考え、土地の者たちにもよく申し伝えておくこと。」

明治２年１１月　開拓使からの場所請負人廃止の通達文書　(49センチ×19センチ)

大正五年

5／1　カレ釣りに行く、七人が相坂の保津（ほつ）船二隻で行く、群来村の困漁場で船頭に頼んで網起こしを一回やる、ホッケ、カレが三モッコとマス一本獲れた、休んでからカレ釣りをやる。

5／2　熊さん、伊三君は忠さんの船でカレ釣りに行く、十時ころ帰って来たが、一モッコも釣って来た。

5／4　大漁で景気がいいのか、古着屋の行商が目立つ。

5／5　鰊一杯とったところがあるそうだ、刺網はそろそろ洗うところもある、鰊漁の漁獲高は四万三千石とある。（この年の漁獲高四万五千石）

5／7　歌棄方面で一杯半、前浜で田岸七～八杯とる。

5／18　敦賀行きの汽船（七〇〇トンほど）が入港して身欠き・胴鰊を積み込んでいる。余市通いは汽船二隻、発動機船二隻が競争している、客はある。

5／19　古平が大漁というので、地方から人の来るのが多い。アメ売り、中国人の反物売り、虚無僧（こむそう）、瀬戸物売り、そのほか大勢で賑やかだ。

5／20　貸売りが六〇〇円ほどあるが、今年は大漁だったので、この分だと六月中ごろまでには入金するだろう。

5／26　鰊製品が値下がりしている。京都から相撲巡業の一行が来るというが、さほど人気のある力士もいないようだ。新地では御大典記念活動写真があるというので、楽隊が町を回っている。

5／27　相撲は三〇余名で古平座でやっているが、五、六人は体のいいのがいる。

5／31　二級町村町会議員の選挙の日だが、町中は割合に静かだ。斉藤兼太郎・村井隈太郎・仲谷勇五郎・田岸藤吉・越中庄太郎の五人が当選。

6／3　子どもたちが集まって、困の裏手に小屋を作って遊んでいる。見に行くと、カレイを焼くところであった、火が危ないので注意する。

6／4　今日から一斉に、町内の呉服屋の売出しが始まる。

6／6　古平座で、歌舞伎芝居があるので見に行く。可も無し不可も無しというところか、大入りだった。

6／13　鰊漁も終わり、漁夫らがみな帰り、町中は寂しくなった。

6／24　自転車競争の手伝いに行く。夜、賞品つくりをやる。雨がポツポツ落ちてきたが大したことはないだろう。

6／25　自転車競争当日だ。幸いに晴れて八時半から始まったが、小樽からも選手が二人来た。午後からは会場いっぱいの人だ。一流選手は五〇周、竹浪・木村・今・(十二)・小川の順で、チャンピオンは竹浪であった。後片付けをし記念写真を写して九時ころ帰る。

6／26　春の衛生掃除をする日だ。昨日の自転車競争の手伝いで疲れた。

7／9　琴平神社祭の日だ。種田干場では曲馬団がかかっている。楽隊に馬、犬が続いて町回りの列が一丁ほども続いている。

7／11　町は祭礼で賑やかである。山車は入舟、丸山、港町、沖村からと四台出た。

7／14　手持ちの数の子、白子二十本ほど「○」へ売る。数の子は二、四〇〇円だったので七〇〇円から八〇〇円の利益がある。めったにないことだ。

8／1　土場の説教所に、本山から管長が来るというので旗やら馬車やら賑やか、花火も揚がる。

8／2　競馬会のことで相談あり。夜、火災予防で浜町を巡回する。

8／15　古平競馬会初日、寄付金四〇〇円と入場料七〇〇円の収入があった。

⇦（次ページ下段へ続く）

高野名幸作さんの日記から

漁村の生活を見る

【17】

ささやかな贈り物

石井愛子

去年の〈長野オリンピック〉のときのことを思い出して書いております。

年明けに、東京に住む息子にセーターを送りました。四、五日しても着いたという知らせがないので問い合わせたところ、息子が自分で電話すると言うので、嫁さんは電話をしなかったとのことでした。

テレビ局に就職している息子は、今、オリンピックの担当で長野に行っているとのこと、息子はプロデューサーをしているので番組の責任者、親心としてみれば、オリンピックは各社共通の番組なので大変な仕事だと心配しています。長野は寒いから、私の送ったセーターを持って行ったと聞いてうれしくなりました。

本番では、選手の皆さんの一番良いところをとらえ、視聴者に感動してもらえるように、細心の心配りをして番組を作ってもらいたいと思っています。日本選手のすばらしい活躍のおかげで、視聴者に感動もらえる番組を作ってほしいと願っています。

本番までもうすぐです。風邪をひかぬように気をつけ、与えられた仕事を全うしてほしいと思うのみです。選手の方々の健康と活躍を願い、ささやかな贈り物をして、子の無事と番組の成功を祈っています。

天狗さんの歩く道

竹内コト

私たちは小さいころから、神社やお寺は神聖なものとして、浜の人たちにとっては大漁や海の安全を祈願する守り神であり、また祖先を祀る心のよりどころでもありました。

特に神社のお祭りは町一番のにぎやかな行事で、子どもたちにとっては最大の楽しみでもありました。

琴平神社のお祭りは、ずいぶん前から七月九日からと記憶していますが、お祭りの日を指折り数えて待っていたものです。

そのお祭りが近づくと、今はもう見られませんが、子どもたちが道路に白い砂を敷くという変わった習慣がありました。

宵宮祭の前日になると、それぞれの町内の子どもたちが集まって道路清掃をし、丸山の下や、今のふるびら温泉へ行く道路わきから火山灰をリヤカーなどで運び、それを道路の中央に三〇センチほどの幅で敷くのです。海岸に近いところでは、海の砂が使われました。これは渡御の行列の通る道になるのですが、子どもたちにとってお祭りの人気者・天狗さんの通り道ということで、切れ目なく町内に敷かれます。天狗さんが通るまでは、この上を絶対に歩いたり踏んだりしてはいけないのです。この仕事が、子どもたち同

⇦（次ページ下段へ続く）

（前ページ下段より続く）

8／16　競馬会二日目だが、さっぱりおもしろくない。客も昨日より少ない。

8／27　今日も快晴で、先月の二二日からまったく雨がない。一か月以上の日照りで井戸水も減水していて、飲料水不足のところもある。　測候所始まって以来という。

8／29　四〇日ぶりで雨が降る。枯れた作物もあるが、大根にとってはありがたい雨だ。

―― 続く ――

ふるさと歳時記

人の世の峠はるかに亡き妻に捧げる〈3〉

吉川　義雄

里帰り妻のふるさと雪深く

「わたし、サラリーマンと一緒になったのにねェ…」と、生涯に一度だけ私にもらした妻の言葉が、私に決断をさせた。

結婚以来、古平で十年の歳月が流れ、私達は男二人、女一人の子ども達の親になっていた。

この頃、先輩や親しい何人かから、札幌に出て来いと話があり、中には矢のような催促もあった。

二度目の町議選には出ないと宣言していたにもかかわらず、町内会の皆さんの昼夜の要望責めにあい、自分の運命を決める答を引き出すためにも、二度目の立起を承引した。

若僧の生意気な思い上がりを砕くかのように、結果は一票差の落選であった。

数日後、私はすべての恩愛を振り払うようにして、単身、ふるさと古平を飛び出して札幌に出た。十五歳の少年時代から成人になるまで住み慣れたこの街は、第二の故郷として、今度も私を暖かく迎えてくれた。

アカシヤの花房白く北一条

二つのふるさとのことを、この頃、私はよく比較して思うことがある。今では、車で二時間もあれば往来できる街である。

私にとって、刻んできた歴史の濃度の差異はない。片方は、町に入るときから潮の香が感動の涙を誘うし、片方は、喧騒（けんそう）にゆらぐ灯が私に安らぎをくれる。

両方のふるさとは、私のいのちに深々と入りくんで、これならどうだと、優劣を競い合っているようだ。

余談になるが、私の墓は古平にも札幌にも無い。古平にいたとき毎日望見していた、石狩湾をはさんだ対岸の、厚田村望来（もらい）の丘の上にある。

積丹半島の山々が望まれ、春には七千本の桜が咲き、秋は紅葉があでやかさを誇っている公園墓地の中にある。

墓石の大小はなく、芝生の中に同じ形の白い御影石の墓が、行儀よく並んでいる。

両方のふるさとに小さな義理立てのつもりの場所で、私が多分、入居第一号となるだろう。

「もう少し古平におれ。」という親父の強い要望をくぐり抜けて、私の家族がやっと札幌に出て来たのは、私の転出からちょうど一年経ったころであった。

古平から出たことのない子ども達は、よほど電車が珍しかったのか、路傍の石に腰かけて日がな眺めていた。

札幌の住宅事情もまだまだ悪い時代で、北一条東四丁目にやっとアパートを見つけても、六畳一間の二階住まいというものであった。

（前ページ下段より続く）

士のお祭りへの奉仕だったのです。

また町内からは子どもの山車や神輿が出たり、露店や見せ物もわっと来て、子どもたちを興奮させます。

今の時代はほかにも楽しみが多くなって、昔のようなにぎわいや活気がなくなり、ちょっとさびしい気がしています。

それでも妻にしてみれば、ようやくサラリーマンの妻となり、水いらずの家庭を持てたわけで、早朝からネルの頬かぶりをして、もんぺで浜を走り回ることから解放され、喜びは大きかったようだ。

大通りの端でテレビ塔が建設中で、私達の部屋の窓から、その塔が日ごとに大きくなってゆくのがよく見えた。

近くの小学校に転校した二人の男の子も、成績は変わらず、友達もできて、古平訛（なまり）までみるみる内になくなって私達を驚かせた。

―― つづく ――

遥かなる故郷の思い出
わが闘病生活 ④

[55]

橘 義春

酢卵を飲んで三週間目に血糖値の定期検査に行き、先生から血糖値が少し下がってきたと言われた。まぐれではないだろうと思ったが、まさか先生に酢卵を飲んでおります――とは言えなかったので、栄養士の先生の指示通り毎日の食事をしておりますと、何となくちょっと後味の悪いような報告をした。とにかく手段はどうでも血、糖値が下がれば先の見通しが明るくなる。

それからは、三週間ごとの定期検査のたびごとに血糖値が少しずつ下がり続けたので、酢卵をこれからも続けてみようと決心した。

その後も血糖値は下がり続け、ついに187ミリあったものが110ミリまで下がり、正常の状態にまでなったが安心出来ず、それからも六か月ほど続けて酢卵を飲み続け、現在は毎年の成人病検診でも血糖値は90から93ミリと安定し、完全に糖尿病から解放され、あのお医者さんの遺言書通りになり、今は亡きお医者さんと酢卵に感謝している。

東京にいる私の妹も糖尿病で血糖値が高く、苦しんでいるようなので、私が試して効果のあった酢卵をすすめたが、本人には思ったような効果が無かったらしい。考えてみると、各人の体質とか、病気の進行状態によっては、全部の患者に効くかどうかは疑問のあるところかも知れない。何でもそうだが、病気が重症になってからでは酢卵を飲んでも効果の無いことも十分考えられることである。

この酢卵の話は、テレビで放映されてからしばらくして、あちこちでその効果が認められたようで、月刊のいろいろな健康雑誌にこのことが載り話題になったことがある。

いずれにしても、体調がおかしかったら早期検診、早期治療が一番でねェベガ・・・。

不整脈

糖尿病が治って、ヤレヤレとホッとしていたら、またまた厄病神のヤツが、「糖尿病ょさようなら、不整脈ょこんにちは」と、とんでもないお客を連れて、「また来たでェ――」と、ばかりやって来てしまった。

「なーンも、俺のとこにばっかり来ねェで、あっちの方サ行ってケレ。アカンベェーだ」

そのころ、体の調子が少し変だと思うようになった。トイレで小便し終わったとき、目の前の窓の格子がゆらゆら、クニャクニャと見えたと思った途端、倒れてしまったのだ。どのくらいの時間倒れていたのかわからないが、気がついたらトイレの中で長々と寝そべっていた。

「どうしたんだべこれは・・・」やっと思い出した。俺はここで倒れたんだと。やっと起き上がったが、顔にあったかいものが流れているようだ。手で顔をペロンと拭いたら、手のひらが血で真っ赤であった。

これは大けがだ。

「大変だっ！」と大声を出したら、部屋から家内がびっくりして飛び出してきた。私の顔を見て二度びっくり。倒れるときに、トイレにあった花びんに額をもろにぶっつけて一センチちょっと切ったのだが、幸いにも目でなくてよかった。

それからというものはトイレでは気をつけるようにしていたが、またまたトイレで倒れてしまった。頭がフゥーとなるところまでは覚えていたが、気がついたら、家内と長男が「大丈夫か？」と言って、抱き起こしてくれていた。

――続く――

古いノートから ④

稲倉石の思い出つづり

[15]

富山市 高橋 藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

漂う難破船

―（昭四十三・四・記）―

今日見た積丹の海は、波もなく鏡のように静かだった。

だが、ひとたび鉛色に染まるや、まるで魔性に取り憑かれた野獣のように荒れ狂い、自然の厳しさを見せつける事がある。

日本海の荒波が暴れ狂う豊浜あたりの磯辺には、四季を問わず必ず二・三隻の難破船が横たわっている。

おそらく尊い人の命を奪い取ったであろうこれらの船が、さも、何事もなかったかのように潮の流れに漂い、えぐり取られた船腹からは、錆び色に汚れた潮を吐き出していた。

のたりのたりとさ迷う船の上では、小さな蟹が戯れ、鴎が羽根を休めていたが、ここ積丹の侘しさを、無言で語りかけているような気がした。

待ち遠しい春

―（昭四十四・二記）―

二月一日。

今日の稲倉石の積雪、約二メートル。

例年に較べるとぐーんと少ないのだが、それでも社宅街はすっぽりと雪に埋まり、連日のようにブルドーザーが除雪をしてくれる。

雪の少ない冬とはいえ、昨年の十二月以降の一日の積雪量の最高が八十センチ。正午の最高気温が三度だったから、内地の皆さんとは比較にならない厳冬である。

でも稲倉石では、近年にないしのぎ易い冬なのだが、三月までは、日曜日ごとの屋根の除雪は欠かせない。

積雪が屋根の軒先と同じ高さになり、冬眠から醒めた熊が穴から這い上がるように、雪の中からアノラックをまとった人間様がゴソゴソと出て来る。

屋根の傾斜は、子供たちの恰好のゲレンデとなり、雪で作った「かまくら」はママゴト遊びの家となる。

吹雪が舞い上がる冬の寒さが厳しいだけに、春の訪づれが本当に待ち遠しい。

さようなら稲倉石

―（昭四十四・七記）―

私は今、六月二十一日付けで転勤を命ぜられた富山工場に赴任している。

ここから見える立山連峰がすごく奇麗だ。

まるで、鬼が爪で引っ掻いたように、ガキガキした険しい三千メートル級の山々が、あたかも屏風を広げたように立ちはだかり、新参者の私の目を楽しませてくれる。

転任した富山工場は、若さに溢れ勤め心地は満点だ。

それに、稲倉石では、太陽が山から昇り山に沈むという、狭く短い日照時間だったが、富山では、朝の立山連山を金色に染め、後光を射しながら神々しく太陽が昇り、人と大地にたっぷりと自然の恵みを注ぎ、海と空を真っ赤に染め、ゆっくりと日本海に沈む。

太陽が、私たちと、こんなに長く戯れているんだなあと実感する。

孫たちとまた逢う日まで

渡辺ハツエ

私は一〇余年前の新米？婆当時の、あの日あの時のことを懐かしく思い出しているこのごろです。つい昨日のことのように思われます。

その年の夏のこと、横浜から息子の家族がわが家にやって来ました。嫁さんが二度目のお産をするためであり、老夫婦だけの静かなわが家は急に明るく、賑やかになりました。二歳半の孫娘は、自分のことを「みかちゃん」と言って愛嬌（あいきょう）をふりまき実にかわいい。

出産の予定日は八月二七日とのこと、息子は二晩泊まって、迎えに来る日のことを約束して帰った。

予定日を過ぎて九月三日の朝に嫁さんが入院するのに、孫が後を追ってはいけないと思って外へ連れ出した。ころ合いを見計らって帰って見ると、嫁さんは、「行って来ます」のメモを残していなかった。孫は母親のことは何も言わなかったので、私もホッとしました。

その日、午後一時過ぎになって、病院から男児出産の朗報を受けて私は感激しました。早速息子に電話したところ、待望の男児を得て、私以上に感激している様子が電話から伝わってきました。

その晩の八時ごろのこと。嫁さんからきた電話を孫が受けてしまい、一言、三言話しているうちに「みかちゃんも行く」と言って、泣き出してしまいました。かわいそうだったが、耐えてもらわなければならない。二人で寝床に入ってから私はいろいろと迷ったけれども、母親の今の様子をようく話して聞かせた。孫は私の話したことが分かったとみえ、その夜からすっかり婆ちゃん子になってくれました。

〈ぬいぐるみ〉のミッキーちゃんを真ん中にして、孫と私は母親の帰る日を指折り数えて待ちました。夜中にふと目覚めて見ると、真ん中にいるはずのミッキーちゃんは横にいて、孫は私の枕に自分の枕を並べて無心に眠っていました。その時の孫の寝顔をとってもかわいいと思いました。

嫁さんは入院してから六日後、産後の肥立ちも順調で、母子ともに元気に退院して来ました。

息子の家族はそのままわが家にとどまり、滞在八〇日で、多くの親戚の皆さんのご厚志を感謝しながら、十月六日、小樽港からフェリーで帰って行きました。主人と私は弟夫婦の厚意で、車で孫たちを小樽まで見送りすることができました。その日も好天に恵まれて、私たちにとって生涯忘れることのできない感激を体験しました。

「孫たちよ、元気でね。さようなら」

俳句

渡辺ハツエ

顧みる新米婆の奮闘記

背が伸びた孫の電話は他人めき

飽食日本長寿国にもかげりあり

石井愛子

ウインドー孫に着せたい服がある

年金で命拾って老い二人

雪も消え老いも背をのし腰をのし

▼お知らせ▲

四月末で古平町史編纂委員の任期が満了し、これをもって編纂委員会を一時閉じることになりましたので、《せたかむい》は町史編纂室で発行・編集を続けることになりました。また、これを機に《せたかむい》の題字も見やすい書体に変えました。

俳句

古平ホトトギス会

春闘の旗ひらめくや役場前　斉藤波留
淡雪は哀しと亡母は句を残し　山口悦子
崖くずれ被う網目の蕗の薹　よしざきり
頬被りといてはずし娘コーヒー飲む　大和田絵伊
漁火も啄木像も見えし丘　仲谷美砂
着脹れて互いに紅の色の濃く　仲谷比呂子
セーターの胸にピエロの飾りかな　仲谷安代
鶯や鳴く音路地なか通り抜け　越野敏雄
花芽萌え土盛り上りもりあがり　関口勝志
なごり雪ポンポン船の出る港　室屋弘子
退院の日近づきし春となり　山口浪
春雨や母看取る娘の布団来る　大島喜恵

古平ホトトギス会会長の水見句丈さんが、すでに皆さんご承知のように去る四月四日お亡くなりになられました。『せたかむい』にも投稿をいただいておりましたが、ここに俳誌・ホトトギス（五月号）に掲載された近詠の一句をご披露し、そのご冥福を心からお祈り申し上げます。

減速し吹雪襖を突き抜けし　句丈

短歌

古平町単短歌会四月詠草

この朝み寺の境内に霜下りて銀杏拾ふに吐く白し　竹内コト
用件を書きて置かれあり難聴を気遣ひくれし友のはからひ　池田テル
この日頃春めきたれど母の住むオホーック沿岸の気温は低し　鈴木時子
朝々に声かけやりし新聞少年受験のためか今年は見えず　榊佳世
春を待つ心ひびき軒氷柱一日したたり小さくなれり　東美知
落葉松の黄金の落葉は坂道に寄り長き帯なす　奥山きよみ
沖時化て船の音なき海白し激しくふりくる雪を呑みつつ　堀典子
どんど焼の煙は静かに立ちのぼり幼き頃のふるさと思ふ　田中香苗
君のふみ開けば花の写真出づ美しき菖蒲五輪うつれり　菅原節子
ストレスを感じし時は立ちて無意識にハミングする癖　丹後初江
海遠く雄冬の山並見て居りし夫が呼びたり春の色ぞと　山口スヱ